

確かな学びを支える国語科学習の授業と評価

～ 国語科から見た自己評価・相互評価と小中連携～

栗田稔生 島末智成 森知佐登

はじめに

昨年度は、国語科から見た「学びを支える力」と、「学ぶ力」を育むための授業と評価について考えてみた。

成果としては、以下の3つが挙げられる。1つめは、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」を学習していく国語の学習は、「学びを支える力」と国語科独自の「学ぶ力」には重なる部分が多いことが明らかになったこと。2つめは、日常行っている活動も国語科の学習として捉え、指導していくことで国語科の学習にも成果が波及していくこと。3つめは、「学び合い」を積極的に取り入れていくことで学習に成果が上がることである。

反対に、課題としては、以下の2つが明らかになってきた。1つめは、子どもたちが自分たちが取り組んでいる学習の状況や成果を自分自身で意識できるようにするなかで、学習をより確かなものにしていかなくてはならないこと。2つめは、小学校の限られた時間だけではなく、小学校卒業後の中学校の活動や学習も視野に入れていくことで、より小学校での学習を確かなものとしていくことである。

1. 研究テーマ設定の理由

昨年度残った課題は、子どもたちが学習している中で、自分の学習状況や学習成果を自分自身で意識できるかどうかということと中学校の学習を視野に入れていくことの2つであった。そこで本年度は、国語科の学習の中で行われる自己評価、相互評価と国語科から見た小中連携について考えていく。

自己評価や相互評価は、国語科の学習に限らず、様々な場面で行われている。自分自身がどんな活動をしてきたのかを自分で評価することや、お互いの良さを感じたり、お互いを評価しあったりすることができるようにしていきたい。そうすることで、子どもたちが、今、何のために学習をしているのかということや、学習していることの成果や過程を意識していけるようになっていくと考えた。

また、中学校で行われる学習を視野に入れていくことで、小学校で培わなければならない学びを、より具体的にしていきたい。

そうすることで、昨年度から研究している「確かな学び」が、より確かなものに近づいていくことになると考えた。

そこで、研究テーマを「確かな学びを支える国語科学習の授業と評価」とし、本年度は、国語科から見た自己評価と相互評価、小中連携を中心に研究していきたいと考えている。

これらのことを意識した授業を積み重ねていくことによって、確かな学びがより深まり、「今ある自分そのものを大切にしながら、言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』などの言葉を大切に活動を通して、他者と関わり、表現したり、取り入れたりすることによって、さらに自分の内にある思いや考えを豊かに自分らしくしていこうとするとともに、人間関係をも豊かにしていこうとする子」、つまり表現愛を発揮している子どもが育まれることになると考えている。

2、学習構成からみた自己評価と相互評価

「確かな学び」を支えるためにも、日々の学習を、「何のために学習しているのかが意識できるような学習にする。」「今行っている活動は、目標を達成するために適切な活動であるかどうかを判断することができる。」学習にしていく必要がある。そのためには、子どもたちが、自分自身の学習状況を把握しながら学習を進めていけるようにしなければならない。

このような学習にしていくためには、自分の学習を自己評価できるようにしていきことや、友だちとの交流によって行われる相互評価を取り入れていく必要がある。また、それらの評価を学習の中で行っていけるようにしていく必要がある。

そのために、学習場面における自己評価や相互評価が考えられる場面を、以下のように分類することから始めてみた。

(1) 学習の導入場面

まず、学習の導入場面では、子どもたちが、これから始めていく学習で、何を目標にして学習を進めていくのかを意識できなければならない。そのために昨年度に引き続き、単元の目標をあれこれと多く設定せず、「この単元では、〇〇の学習である。」ということを確認する必要がある。単元の学習の目標が明確になれば、子どもたちは、「何を学習していく時間なのか。」ということ意識しやすくなると考えている。

また、子どもたちが、どんな姿を目指していけばいいのかが意識できるように、その目標となるより良い姿は、子どもたちの具体的な姿で示していくようにしなければならない。

例えば、スピーチを扱う教材では、「一分程度の話をしていこう。」「十以上の文がある話をしていこう。」「参考になる資料を見せながら話をするができるね。」などの言葉がけをすることで、スピーチをする際の自分の姿を意識できるようにしなければならない。

そのためには、単元の学習が始まる際に、目標となるより良い具体的な姿を文書の形にして、子どもたちに提示することや、自分が目標とする姿を考える時間を設定することなどが必要である。

つまり、指導者がより良い姿を子どもたちに示すという方法で、子ども自身がお互いを評価していくための規準を示したり、子どもたち自身が、これから始まる学習で大切になる規準に気づいていくようにしたりするということである。

(2) 学習の追究場面

次に学習の追究場面では、昨年度提案した「学び合い」による学習を積極的に取り入れていくことを取り入れていきたいと考えている。

「学び合い」を取り入れた学習では、指導者の評価をもとにしたグループ構成にすることや、学習目的別のグループを構成するなどの学習形態の工夫が考えられる。

この「学び合い」は、お互いに賞賛し合ったり、アドバイスを送ったりする姿が見える学習である。この「学び合い」での、児童Aが児童Bに対してアドバイスを送ったという例を考えてみる。児童Bは、児童Aに教えてもらうことで、自分が知らなかったことを知ることができるというような学習の効果が期待できる。児童Aにとっては、児童Bに送るアドバイスの言葉を見つけること自体が、自分が学習したことを再認識するという学習の効果が期待できる。そのような「学び合い」では、子どもたち同士の相互評価が行なわれる。このように「学び合い」を「相互評価」という見方で考えていくようにしたい。ということは、相互評価を行なった際に、友達の何を評価していくのかを具体的に示すようにしていかななくてはならない。友だちの姿の何を評価し、どんなアドバイスを送り合うのかを意識できるようにしなければならない。

また、自分が学習したことを再認識するということは、「何のために学習しているのが意識できるような学習にする。」「今行っている活動は、目標を達成するために適切な活動であるかどうかを判断することができる。」ことにもなるので、自己評価にもつながっている。つまり、単なる教え合いにとどまることなく、それぞれの学びを深めたり、自己評価につながったりする「学び合い」を目指していくということである。

11月の4年生の実践では、自分たちが書いた詩の続きを4人でつなぎ合わせる活動をする際に、相互評価を取り入れた。詩の続きをつなぎあわせて完結するお話にする活動を行う。子ども達は、グループで詩の続きを作っていくことになるが、話し合いながら言葉を選んでいくことになる。その活動は、お互いの考えを出し合い、アドバイスを送り合いながら作っていく活動になるので相互評価しながら活動していくことになる。



図2 - 1 相互評価しながら詩を書く

また、自分達で作った詩を交流することで、友だちのアドバイスをもとに、自分達が書いた詩の表現をふりかえていくことになるので、交流する際の相互評価もしていることになる。

(3) 学習のふりかえり場面

このふりかえり場面では、今まで行なってきた学習をふりかえることが主な学習活動になる。このふりかえりの際に、自分の姿をより分かりやすくふりかえる必要がある。そのためには、今までの学習の成果を蓄積しておいてふりかえるというやり方や、画像や音声を活用して自分の声や姿を、聞き直したり、見直したりしていくというやり方も考えられ

る。また、学習時間の最後に、友だちの良かった姿や、新しく学習したことなどを交流する時間を設定するなどのふりかえり方もある。

本年度6月の2年生の実践では、教科書教材を読み取った「表現の工夫」や「表現の内容」を評価観点とし、自分の作文や友だちの作文を観点に沿って評価していくという評価活動を取り入れた。この活動を取り入れることによって、自分の作文について漠然と「うまく書けたかな。」としかふりかえることができなかつた子が、「どんなことが書けていたらうまく書けたといえるのか。」ということ意識しながらふりかえることができるようになった。



図2 - 2 観点に沿った相互評価

3、観点別に見た自己評価と相互評価

3つの場面でとらえなおした自己評価と相互評価を国語科の「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」という観点別に、どのようなものになっているのかを考えていくと以下ようになる。

(1)「話すこと・聞くこと」

「話すこと」「聞くこと」の活動は、学習の内容によって低学年では身近な人が相手であったり、高学年では、学級の枠から発展し、地域の人や相手になるなどの違いがあるにせよ、相手があって初めて成り立つ学習である。そのため、基本となる良い姿は、「相手に自分の伝えるべき内容をしっかりと伝えようとする姿」「相手が伝えたい内容をしっかりと受け取ろうとする姿」になってくる。

ということは、例えば「話すこと」について自己評価をする際も、「しっかりと伝えるためにどんな力がついたのか。」や「しっかりと伝えるためにどんな学習を進めてきたのか。」など、学習でつけた力やその過程について自己評価することになる。

また、「話の途中で口を挟まない。」「みんなの方を向いて話す。」「最後の言葉までしっかりと話す。」など姿もふりかえる必要がある。相手からの感想を聞くことで自分の姿をふりかえったり、ビデオや録音によって自分の姿を見直すことで、この自己評価をしやすくしていく工夫も必要になる。

(2)「書くこと」

「書くこと」の活動は、言葉を書き記すことが主な活動になる。相手を想定して書く説明文などは、読み手と書き手という役割を通して見ると、「読み手に伝わるように書こうとしている姿」が基本となる良い姿といえることができる。

また、日記や創作文などの相手を意識して書くというよりも、自分の中に湧き出てくる言葉を書き記していくという活動の場合は、自分の思いがしっかりと表現できたかという見方が優先され、「自分の思いをよりよく表現しようとしている姿」が基本となるより良い姿といえる場合もある。

そこで、相手を意識して書く活動の場合は、「相手に伝わるためにどんな表現を身につけたのか」というつけた力や「相手にうまく伝えようとしていたのか」という過程を自己評価をする必要があるし、自分の思いを表現していく活動の場合は、「自分の思いをうまく表現するためにつけた力」や「自分の思いをうまく表現しようとしていたのか」などに対して自己評価をしていく必要がある。

相手からのフィードバックによって自分の姿をふりかえったり、書いた作文を比べたり、また、技能的側面からは、目標となった表現技法を使って書いているかどうかを見直したりすることで、この自己評価が可能になると思われる。

また、学期に1回書いている「自由作文」を読み比べたり、6年生の段階で、1年生から6年生までに書いた作文や日記を読み比べてみて自己の成長をふりかえり、自己評価をしていくということも考えられる。

(3)「読むこと」

読むことの活動は、昨年度より「声に出して読む活動」と「文章を読みとっていく活動」と分類して考えていくようにしている。前者は、音読に代表されるように言葉を声に出していく活動になるし、後者は、いわゆる読解という活動になる。

前者では、「しっかりと声に出して言葉を読もうとしている」姿が、基本となるより良い姿になる。自己評価する際には、自分の読み声に対して評価することになる。例えば、「文章を間違えずに読もうとしていたのかどうか」ということや、「間をとって読むことができたかどうか」などが考えられる。これは、声に出しているので、読んだその都度評価していく場合もあるし、作品に出会ったときの読み方と学習がある程度進んだときの読み方を比べるという評価の仕方もあると考えられる。自分の読み声を友だちに聞いてもらい、相手からのフィードバックによって自分の姿をふりかえったり、ビデオや録音によって自分の姿を見直すことで、この自己評価が可能になると思われる。

後者では、学年によって違いがあるものの、書かれている内容などを読みとっていくことが主な活動になる。

つまり、「文章に書かれている場面の様子や登場人物の気持ちなどを読み取ろうとしている」姿や「作者の表現の工夫や伝えたい内容を読み取ろうとしている」姿が基本となるより良い姿になる。この姿は「自分の読み取ったこと」や「読み取っていく過程」を自己評価していくことになる。これは、自分が読みとった際に使用したワークシートなどを読み返したり、客観テストなどでも評価することが可能になってくると考えられる。また、読み取った様子を読み声に反映させるという学習の場合には、読み声と読み取りを合わせて自己評価する場合も考えられる。

4、国語科が考える小中連携

今年度は連携の第1歩として、「書くこと」の学習を中心に、小学校と中学校では、子どもたちが書いた文章がどのような育ちになっているのかを探っていくことを始めていきたい。書かれた作文の表現や文種の違いを明らかにすることから小中連携を考えていきたいと考えている。

以下にあげる表は、今年度から取り組み始めた研究であるので、本年度以降も研究を継続し、変えて行かなくてはならないものとして考えている。

(1)「書くこと」の育ち

	低学年	中学年	高学年	中学校
表現の特徴	順序性	軽重	組み合わせ	焦点化
	事実を詳しく書く、遊んだこの名前全員分。	自分の考えを明確に出す。理由をつける。	相手を意識して自分の考えを書く。	社会を構成する一員としての意識が見られる。
	自分中心、なりきり入り込み、書くことがおもしろい	自分以外の物へ全体全体ストーリー内面への気づき	自分を客観的に見る多様な価値観へ、第三者的見方、客観的分化、内面の意識化	普段の生活や一般的なことがらに置き換えることができるようになる
言語事項	会話文、句読点	改行、書き出し	慣用句	常套句
表現の工夫	絵、写真、たとえ、くりかえし、擬音語、擬態語、接続詞、助詞、	指示語、接続詞、擬音語擬態語、擬人法、複合動詞、身近な例、題名の工夫	言い換え、類推、文末表現、仮説、まとめ、文の長短	詩的言語を活用できるようになる。簡潔な言葉でリズムカルに綴れる。レトリックの種類が増す。対句が使えるようになる。逆説的な言い方が使える。
接続詞	「まず」「次に」「さいごに」	「しかし」「だから」	「つまり」「このように」	「もっとも」
表現方法	「おもしろい」「たのしい」「だれが」「どうした」	「どのように」「どういうところが」	「なぜ」「おもしろいを使わずにおもしろいを表現する」	「です」「ます」文末表記が統一できる。時制の一致
文章構成	時間や出来事の順番に並べている。	始め - 中 - 終わりを意識できる。	始め - 中 - 終わりを明確に区別できる	プロットを意識することができる

表2-1 小学校と中学校の「書くことの育ち」

この「書くこと」の育ちを見てみると、表現の特徴では、高学年の「自分を客観的に見る。多様な価値観や第三者的な見方、客観的な見方ができる」ような作文から、中学校の「普段の生活や一般的なことがらに置き換えることができるようになる」作文へとつなが

っていることがわかる。また、文章構成では、「始め - 中 - 終わり」という文章構成から「プロットを意識した」文章構成へとつながっていることがわかる。

(2) 文種の分類

次に書く作文の文種について考えてみると、以下のような違いが現れてくる。題材を運動会や遠足などの経験したことなどが主になる「こと」と、実際に見た風景や動植物などが主になる「もの」と、自分の考えを主としていく「考え」に分け、感情を交えながら書くのか、事実を強調して書くのかという観点も含めて分類してみた。

	感情を交えて書く		事実に即して書く
こと	体験文（低学年から）		報告文（中学年から）
もの	描写文（中学校から）		説明文（低学年から）
考え	感想文（全学年）	意見文（高学年から）	論文（中学校から）

表2 - 2 小学校と中学校の文種の分類

感想文は小中学校の全ての学年で書くことができる文種になる。他の文種を育ちを考慮して考えていくと、まず、体験文を書くことができるようになり、報告文や説明文、意見文を書くことができるようになっていく。そして、中学校になると、描写文や論文を書くことができるようになってくる。

このような「書くこと」の育ちと「文種の分類」をもとにすれば、高学年では、「自分を客観的に見るような表現を使って、始め - 中 - 終わりの文章構成を明確に意識した意見文を書く」という学習をするということを指導者が意識できるようになる。そうすることで、小学校で培う「書くこと」の学びをより具体的にしていけるようになっていくことになり、中学校で書く文章へとつながっていくことを思われる。

おわりに

「確かな学び」は小学校だけで達成されるものでも、中学校だけで達成されるものでもなく、それぞれの学年にあった学びをしっかりと行っていくことによって初めて確かな学びが達成されるということがわかる。

また、本年度は幼稚園との連携については研究できなかったのですが、今後は幼稚園との連携も視野に入れていかななくてはならない。

そうしていくことで、「今ある自分そのものを大切にしながら、言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』などの言葉を大切に活動を通して、他者と関わり、表現したり、取り入れたりすることによって、さらに自分の内にある思いや考えを豊かに自分らしくしていこうとするとともに、人間関係をも豊かにしていこうとする子」、つまり表現愛を発揮している子どもが育まれることになる。